半田銀山そばの会

（前列左から）宍戸興一さん、氏家浩会長、片平滋事務局長（後列左から）野地実さん、渡邉斉さん、小野幸男さん、阿部豊さん

元々は金色の稲穂が輝いていた田んぼ。高さ約2メートルの雑草が生い茂り、荒れ果てた姿に

昭和45年醸芳中学校男子バレー部。部活で培った郷土愛がそば栽培の原点に

耕作放棄地の増加、風評被害――
「オレらで何とかするべ」第2の青春が始まった

高齢化、後継者問題、耕作放棄地、そして、風評被害。農業従事者の心も、町並みも、荒れていきます。

「ふるさとが廃れるのは悲しい、そばで町を元気にしよう」と「半田銀山そばの会」が立ち上がりました。

誕生のきっかけは地域への愛情

「この笑顔を見てると、あぁ、やって良かったって思うよね」。お客さんがおいしそうにそばをすする姿を見て、しみじみと目を細める「半田銀山そばの会」の皆さん。東日本大震災による風評被害や農産物のイメージ低下を打開し、地域を元気にするため、町内の耕作放棄地を活用したそば栽培とそば打ちの実践を行っています。

半田銀山そばの会は、平成23年11月、地元有志で設立されました。農業従事者の高齢化、後継者不足、そして、そこに追い打ちをかけるように起こった原発事故の風評被害。「せっかくがんばってきたのに、もうやめっぺ…」。生産者の心も町並みも荒れ、耕作放棄地が増える中、発起人の氏家浩さんが「このまま放っておいたら、のどかで自然豊かな大好きなふるさとの景色が失われてしまう。花も実も楽しめるそばを育てて、町おこしをしよう」と青春時代を共にした元醸芳中学校男子バレー部仲間に声をかけました。当時、県北大会で優勝し、県ベスト8まで上り詰めた強豪世代。卒業後も、社会人チーム「シープエイジ（ひつじ年の男たち）」としてバレーを続け、家族ぐるみで交流を深めてきました。「氏家くんの頼みなら、もちろん」と二つ返事で仲間も賛成。さらに、氏家さんの熱い思いに共感した住民も加わり、平成24年1月に協議会を設立。現在はメンバー約50人で活動しています。

「会を立ち上げたはいいけれど、実は専業農家は誰もいなくて。はじめは苦労したよ」と振り返る氏家さん。「まさか定年を過ぎてから、大型特殊の免許を取ったり、トラクターを買ったりするなんて思わなかった」と事務局長の片平滋さんも笑います。そば栽培のいろはを学ぶため、岩手県や会津地方など、県内外からそば栽培の専門家を招き、学習会を繰り返しました。「被災地同士、共に頑張ろう」と駆けつけてくれることが何よりの励みに。会員の原動力となりました。

現在は、半田地区の山間部や伊達崎地区の果樹園跡地を中心に、町内計8ヘクタールの農地を所有。作付け面積が増えて忙しくなっても、気心知れた抜群のチームワークで補います。平均年齢65歳、みんな高年齢ですが、農機具を使いこなす人やそば打ちを極める人、イベントの段取りをする人、ホームページで活動の様子を情報発信する人など、一人一人の得意分野を生かして活動しています。校庭のバレーコートからそば畑へ。活動場所は違えど、まさに第2の青春時代、真っ盛りです。

「福島産なんて要らない」突如変わった世の中。農業従事者を追い詰める出来事に（福島民友朝刊 2011年3月24日、2012年6月15日付け）

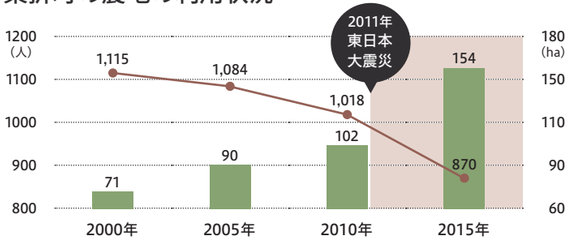
耕作放棄地がそばでよみがえる

根岸
宍戸 輝夫さん

実家が桃とイチゴの専業農家で、父の引退後、長男として土地を継ぎました。周りの生産者がきれいに畑を手入れする中、うちの区間だけ雑草が生え、景観を損ねてしまうと申し訳なく感じていました。そんな矢先、PTAのつながりで付き合いがあった片平さんから声をかけてもらい、土地を提供することに。まさに渡りに船でした。

そばの会は、単に農地を貸して終わりではなく、農地提供者もできる範囲で栽培に携わる仕組みになっています。「自分も『半田銀山そば』を作る生産者の一人だ」という当事者意識が生まれ、さらに郷土愛が増します。全国的に高齢化や後継者不足などの影響から、農家数の減少や耕作放棄地の増加が叫ばれていますが、新しい農業の形として、そばの会のような取り組みも広まっていけばいいなと思います。

桑折町の農地の利用状況



「耕作放棄地」とは、以前耕作したことがあるが、調査期日1年以上作物を栽培せず、この数年の間に再び耕作する意思のない土地。

震災がつないだ縁——

「困った時はお互いさま」仮設住宅での出会いが未来を拓いた

「もっと畑を増やしたい」、募る思いはあれど、体力の限界。そんな中、飯館村の生産者が作業を手伝ってくれることに。「同じ県民同士、がんばっぺ」、心強い一言に救われました——。

1

思わぬ出会いが希望の光に

「うちの畑も頼むよ」。活動を知った町民から、続々とうれしい依頼が舞い込むようになりました。しかし、要望に応えたくても、そば栽培に必要な機械がありません。手作業でやるにも、時間と体力が追い付かない状況——。そんな時、片平さんが仕事で訪れた伊達市内の仮設住宅で、飯館村から避難していた佐藤忠義さんと出会いました。偶然にも、佐藤さんはそば農家。「困った時はお互いさまだよ」と救いの手が。その後、とんとん拍子で話が進み、収穫に使うコンバインや人手を貸してもらえることになりました。

2

1_ 飯館村のコンバインのおかげで、短時間で広大なそば畑の収穫が可能に　2_ 手作業で畑に生えたツルを取り除きます

飯館村前田明神
そば生産組合
佐藤 忠義さん

佐藤さんは「当時、飯館村は『計画的避難区域』に。放射線量も高く、いつ村に帰れるんだろうと途方に暮れる中、片平さんからの声掛けに、『また農業ができる』とうれしくなった。農作業をしている時間が一番幸せ。この地域に住むことができたお礼、せめてもの恩返しになればと思って、すぐに引き受けた」とほほ笑みます。

平成29年3月、晴れて飯館村に戻ることになった佐藤さん。しかし、その後もこの縁は途絶えません。毎年収穫期になると、大型トラックにコンバインを積み、片道1時間かけて桑折町へ手伝いに駆けつけます。

震災がつないだ奇跡の出会い。未曽有の事態、どんな苦難な状況でも諦めなかった二人を希望の光がつなぎました。

地域に愛される存在に

そば栽培を通じて、ふるさとの食文化を学んでもらおうと、昨年から半田醸芳小学校の6年生を対象に、種まきや収穫、そば打ちなどの一連の作業を体験する特別授業が始まりました。

雲一つない青空が広がる8月21日、校舎から南に250㍍坂を下りたところにある学校畑で、種まきが行われました。「おいしくなれー」と願いを込めて、種が分散するよう、大空へ種を放ちます。記録的猛暑となった夏休み期間も、地元の住民が協力して水やりをしたおかげで、そばはぐんぐん成長。秋の山霧が立ち込める10月20日、待ちに待ったそば収穫の日。子どもたちの腰の位置まで伸びたそばを手作業で丁寧に刈り取り、昭和43年製造の貴重な電動脱穀機を使って、その場で脱穀しました。3日間かけてじっくりとそばの実を自然乾燥させた後、会員が持ち寄った自慢の電動※とうみや電動いしぬき、電動磨き機、電動製粉機を使って仕上げ作業を行いました。普段なかなか出来ない体験に、子どもたちは目を輝かせながら、肌でそば栽培の楽しさを感じていました。

より多くの人に、半田銀山そばに親しんでもらいたい——、会員の思いはさらに膨らみます。例年であれば秋の町文化祭で「そば打ち体験会」を開催していますが、今年は新型コロナウイルス感染症対策のため自粛。代わりに、規模を縮小した「新そば祭り」が11月21日、うぶかの郷で行われました。出来たて、打ちたてのそばを目あてに、町内外からお客さんが次々と。オープンから1時間もしないうちに、限定40食があっという間に完売。参加者は心ゆくまで新そばを味わいました。

4

5

3

3_300㍍の畑いっぱいに種をまきます　4_一束ずつ丁寧に脱穀機へ　5_昔ながらの手動石臼による製粉も体験

6

7

6_体重をかけて素早くそば生地を均一に伸ばし、リズミカルに切る会員　7_打ちたてのおいしいそばを囲んで会話も弾みます

ふるさとの景色を大切に守り続けたい

半田醸芳小学校
櫻井 莉愛（りあな）さん

農業体験を通して、食の大切さや農業の大変さを実感しました。うちも農家ですが、そばの会の皆さんの思いに触れて、家の田んぼや畑も大切なふるさとの景色として、ずっと守り続けたいという思いが強まりました。

のど越し良い味わい そば食べて町を応援

新そば祭りに参加（福島市）
高橋 良子さん

息子のお嫁さんが桑折町出身で、今日は孫も一緒に家族で「半田銀山そば」をいただきました。耕作放棄地の解消、地産地消の活動に感動。そばを食べることで、桑折町を応援したいです。

※穀物を選別する機械。収穫した穀物に含まれるもみ殻やわらくずを風で飛ばす。

会員の思い広がる——
「みんなで前を向こう」そばで元気を発信

そばを打ち、延ばしていくように、
半田銀山そばを通して
桑折町の魅力が全国、世界、そして——
多くの人の心の中へも広がっていきます。

かみしめるとふるさとの香りと会員の思いが広がる半田銀山そば

先人から受け継ぐ支え合いの心

追分地区、奥州羽州街道の分岐点に位置する「割烹　仙台屋」。毎月第4水曜日を「銀そばの日」として、つなぎを一切使わない打ちたての十割そばを振る舞っています。

「そばの会の設立式も、うちで行われたんだよ」と話す4代目店主の鈴木清幸さん。おかみのキヨ子さんと共に、会員の一人です。「店の経営もあり、なかなか農作業に参加できない。自分には何が出来るのか？」。自問自答する中で、「料理に携わっている身として、月に1度うちでそばを提供しよう」という思いに至りました。

「おいしい、また来っかんない」と清涼感のあるそばはお客さんからの評判も上々。「1日30食くらいだけれど、新規のお客さんも多くいらして。長く続けてきたから、知らず知らずに口伝いでおいしさが広まったんだと思う」とキヨ子さんも顔をほころばせます。

割烹　仙台屋
鈴木 清幸さん

「桑折町には、『町を盛り上げたい』と考えている人が多い。これぞまさに、『財産』。元々この町は街道の分岐点にあり、さまざまな地域から人が集まっていた場所。先人が長い年月をかけて、助け合いの精神を築いてきた。これからも年代や居住地関係なく、多種多様な人と意見を交わして起こる化学反応を生かして、もっと明るく元気な町にしていきたい」と前を向きます。

町外からふるさとを応援

福島駅から南東へ徒歩10分、大通りから入った小路に和モダンな構えを呈した「蕎麦人」。店を切り盛りするのは、伊達崎地区出身の菅野裕一さん。「ふるさとを応援したい」と、今年から半田銀山そば粉を仕入れ始めました。

「前よりすっきりとした味わいになったね」。常連客の声に、すかさず「桑折町のそば粉に変えたんだよ」と笑顔でアピール。しかし、「まだまだ道半ば。もっと粉の質を高めないと」と胸中を語ります。「正直、今年の出来栄えには文句も言わせてもらった」。生半可な気持ちではなく、本気で桑折町のブランド力を高めたいと思っているからこその愛のムチ。「店で地のものを使うことで、お客さんに『身近にこんなに素晴らしいものがあるんだよ』と、町で頑張っている人のことも伝えたい」と力を込めます。

蕎麦人（そばんちゅう）（福島市）
菅野 裕一さん

最近では、若者や外国人にもそばのおいしさを広めようと、ガレット作りに挑戦。知り合いのフランス料理店へ生地を提供し、新たなファンの心をつかんでいます。「インバウンドの波も押し寄せている。コロナ禍が落ち着いたら、半田銀山そばや桑折町の魅力を世界へ発信していきたい。そばの栽培段階から携わって、町の皆さんと共により良いものを作りたい」と夢を膨らませます。

そばがつなぐ結束力

桑折町のあたたかい人柄の良さと郷土愛があふれる半田銀山そば。味わいだけでなく、会員の思いも詰まっているからこそ、「うちでも扱いたい」「また食べたい」と、新たな桑折ファンの誕生につながっています。

「そばで町を元気にしたい。震災を乗り越え、農業に希望の光を灯したい」。ひたすら信じて歩んだ10年、夢が現実へと変わっていきます。

1

2

1_11月3日に福島駅前で開かれた「蕎麦とロック」。200食が飛ぶように売れた　2_おかみの美枝さんの笑顔が輝く

voice

参加者（福島市）
小松 良行さん

桑折町に親戚が住んでいます。半田銀山そばを食べるのは初めてでしたが、コシがあって食感が気に入りました。コロナ禍でなかなかイベントが出来ない中、久々に街中ににぎわいが戻り、そばを食べて元気になりました。これからも桑折町を応援しています。

参加（福島市）
鈴木 りかさん

10年ほど前に「蕎麦人」を見つけ、今ではすっかり常連です。店主から「桑折町のそば粉を仕入れた」と聞き、早速食べてみることに。半田銀山そばは口当たりが良く、すすった時のざらざらした感じもおいしいです。一緒に連れて行く職場仲間にも大好評です。

サン・フォトこおり
田中 穂積さん

そば畑の写真は、会津地方を中心によく撮影に行きます。震災以降、桑折町にもそば栽培が始まったと聞き、年々撮影スポットが増えてきました。春に咲く桃の花だけではなく、夏に咲くそばの花も見事な美しさです。遠くまで行かなくても、地元にこんなに素晴らしい撮影スポットができました。ぜひ、多くの人に来ていただき、新たな撮影名所となることを期待します。そのためにも、ぜひ全国から人が来てもらえるように、撮影スポットのマップを作成するなど、広くアピールしてもらえればと思います。

半田山を背景にそばの花が咲く

移住者が新たな価値をもたらす——

「桑折っていいね」そばでつながる新たな輪

ここが「第2のふるさと」になれば——。
そば打ち体験を通して、親睦を深め合った移住者交流会。
外から見た視点が加わり、新たなアイデアが生まれます。

11月7日、うぶかの郷で行われた移住者交流会。遠くは神戸から移住してきた参加者10人が、そばを打って食べる時間を共有しました。そのうち3人が移住者ならではの視点で、桑折町の未来を語ります

身近にある町の良さにもっと気付いてほしい

埼玉県から移住
高橋 秀樹さん

10年前に桑折町に移住してきましたが、正直今回の交流会に参加するまで、「半田銀山そば」の存在を知りませんでした。桑折町には、農産物や歴史など他にない魅力がたくさんありますが、認知度が低くてもったいないと感じます。町に来てから「なんて空は大きくてきれいなんだ」と気付かされ、半田山の紅葉や雪景色には「心を広くもとう」と元気をもらっています。身近にある桑折町の良さに目を向けて、どんどん外へ広くアピールするといいと思います。

同世代で頑張っている人と共に町を盛り上げたい

地域おこし協力隊
渡邊 瑛子さん

今年4月に兵庫県から移住し、地域おこし協力隊として活動しています。活動を通して感じるようになったのは、「最初は人見知りな人が多いけれど、実は心の内に町に対する熱い思いがあって、話すとギュッと深くつながれる」ということ。そばの会の皆さんをはじめ、家業を継いだ同世代の若い人たちも、課題と向き合い、町でひたむきに頑張っているなと感じます。そうした人たちとつながって、励まし合いながら楽しくまちおこしをしたいと考えています。

人と人のあたたかいきずなを感じられる町

宮城県から移住
大山　豊さん

今回の移住者交流会をはじめ、桑折町は「人とのつながり」を大切にしている町だなと感じます。中学生と幼稚園児の娘がいますが、転校してきてから子どもだけでなく、親同士の交流も盛んで、地域内で家族ぐるみの付き合いができています。以前は隣近所に誰が住んでいるのか分からない状況でしたが、桑折町は地域の皆さんがあたたかく迎え入れてくれて、居心地が良いです。これからも、「人と人のきずな」を感じられる町であってほしいと思います。

桑折の大地に復幸の花が咲く　そばがつなぐ、まちづくり

まもなく震災から10年。心の不安を表すかのような荒れ果てた農地に、「ふるさとを元気にしよう」という郷土愛が種となり、「大丈夫」と未来を信じ続けた心が水となり、多くの助けや励ましが肥料となり、こんなにもきれいなそばの花が咲きました。そばの花言葉は、「喜びも悲しみも、懐かしい思い出」「あなたを救う、幸福」。まさに逆境を乗り越え、地域に明るい光を灯した「復幸のシンボル」として、多くの人の心の中でこれからもずっと咲き誇ります。

住民自ら取り組むまちづくりが評価され、県と福島民友新聞社が実施する令和元年度豊かなむらづくり顕彰事業で、半田銀山そばの会が優秀賞を受賞しました。

まちづくりは、決して一人ではできません。誰かに言われてやるものでもありません。「この町が好きだから、町のために何かする」。そんなまっすぐなふるさとへの思いが、多くの人の心を動かし、希薄だった住民同士をつなぎ、新たなコミュニティーを生み出し、まちづくりの原動力となるのです。

この特集の中に、この町ならではのまちづくりのヒントが隠されているかもしれません。農業従事者、学生、料理人、移住者、そして、町外の桑折ファン。そばを通してつながったきずなは、長く、太く、力強く、多くの夢を乗せて、未来へとつながります。

特集　つなぐ。（完）——

諦めないで挑戦し続ければ、夢はきっとかなう。半田銀山そばの会の挑戦は、これからも続きます。皆さんと共に、そして、皆さんのそばで——。